

日本の民間薬 —その62—甘茶蔓(アマチャヅル)

千葉大学環境健康フィールド科学センター 池上文雄

「基原」

アマチャヅル(甘茶蔓: *Gynostemma pentaphyllum* Makino)の葉あるいは全草を乾燥したもの。七葉胆しちようたんともいう。

アマチャヅルは、日本全土のほか、朝鮮半島、中国、東南アジアに広く分布し、山野や藪地などに自生するウリ科(Cucurbitaceae)の雌雄異株のつる性多年草で、茎は地上を這うか、鳥足状複葉の葉柄から出た巻きひげで他の植物などに絡み付いてよじ登って繁茂する。花期は8~9月、花は円錐状の黄緑色の小花を多数つけ、果実は球形の液果で、熟すと黒緑色になる。

ブドウ科のヤブガラシによく似たつる性植物であり、葉を噛むと甘みがあるのでこの名があるが、アマチャ(甘茶)とは関係ない。また、ヤブガラシは茎の節々が赤紫色で、葉面には全く毛がなく、巻きひげも葉の反対側についている点で区別ができる。

中国では生薬名を七葉胆といい、欧米ではジオオグランと呼んでいる。6~9月に葉や茎を採取し、水洗い後に2~3cmに刻み、天日乾燥したものをを用いる。

「来歴」

比較的新しい薬草で、薬用としての利用が初めて記されたのは、中国で消炎解毒、止咳去痰、慢性気管支炎に対する利用である。我が国では、1977年の「アマチャヅルには朝鮮人参と同様のサポニンが含まれる」という発表から、雑草として扱われていたものがにわかに重要な薬草になった。

「成分」

茎と葉には、オタネニンジン(朝鮮人参、高麗人参)に含まれるサポニンのジンセノサイドと類

似するトリテルペノイドサポニンのジペノサイドなどが含まれる。

「薬理・毒性」

人参に含まれるジンセノサイド11種のうちの4種と同じ成分を含み、このジンセノサイドは溶血作用が少なく組織細胞を若返らせる作用があるといわれ、中国などでは古くから使用されてきた。ただし、成分の含有組成が朝鮮人参と異なっているので、全く同じ効果であるかどうかは明確ではないが、粗サポニン画分には高脂血症改善作用のあることが報告されている。また、疲労回復、老化防止、糖尿病、ストレス解消、胃潰瘍、肝臓病、循環器系機能向上などのさまざまな効能が見出されている。

副作用として、少数患者に悪心、嘔吐、腹脹、便秘、眩暈、耳鳴りなどが現れることがあるが、いずれも比較的軽微で、続けて服用できる。

「薬効と主治・用法用量」

味は苦、性は寒、無毒で、消炎し解毒する、止咳し去痰する効能があり、慢性気管支炎を治すことから、中国の民間では古くから全草(七葉胆)の粉末を老人性の慢性気管支炎などに用いている。ただ、喫煙者の気管支炎に対しては治療効果がやや劣るといわれる。また、強壯、強精、利尿、肝臓障害、ストレス性疾患などに用いられる。

我が国の民間療法では、乾燥した茎や葉を、1日量5gとして約1Lの水で番茶のように煮出して数回に分けて服用すると、鎮静作用があるのでストレスが引き起こす胃潰瘍、動脈硬化などの予防に応用でき、生活習慣病の予防、アンチエイジング効果も期待できるとされている。咳止めには、